

グラジオラス穂やけ症の耐性評価法を開発しました

農業総合センター生物学研究所

本県のグラジオラス切り花は、作型が夏期の高温期を含むため、高温や強日射で花穂周縁部が焼ける穂やけ症が発生し、出荷量の減少や品質低下が問題となっています。そのため、穂やけ症が発生しにくく、夏期に安定して出荷可能な品種の開発が要望されています。当研究所では、穂やけ症に強い品種育成を効率良く進めるために、穂やけ症耐性の評価手法を開発しました。

穂やけ症が発生する条件と品種間差

穂やけ症の発生には品種間差があり、発生が多い品種では夏期の生産が困難になります（写真1）。

また、発生には高温や強日射などが影響するため、開花時期や年次によって差があり、品種育成段階では評価が難しい形質です。



写真1 品種による穂やけ症発生程度の違い

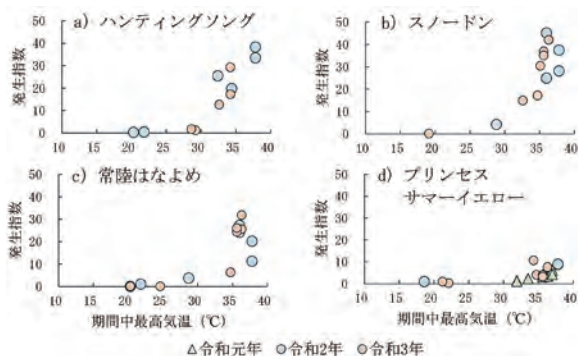


図1 開花日前7日間（開花日含む）の期間中最高気温と穂やけ症発生指数の関係（一例）

気温と穂やけ症発生の関係を説明

各品種における開花日前7日間（開花日含む）の期間中最高気温と穂やけ症発生指数との間には正の相関が認められました。特に、穂やけ症が発生する品種では、期間中最高気温が33～35℃付近から穂やけ症発生指数が高くなる傾向がみられました（図1）。

穂やけ症耐性評価のための基準品種

5月下旬及び6月中旬定植の作型（開花日前後に高温遭遇する作型）における各品種の穂やけ症発生指数を相対比較したところ、「ハンティングソング」及び「スノードン」では穂やけ症耐性が弱、「常陸はなよめ」では中、「ソフィー」はやや強、「プリンセスサマーイエロー」、「常陸きらめき」などは強と評価できました（図2）。

穂やけ症発生程度をこれらの基準品種と相対比較することで、新品種を育成する過程において、穂やけ症耐性を評価することが可能となりました。

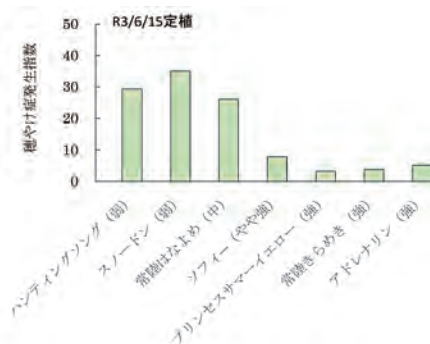


図2 高温遭遇作型における穂やけ症発生品種間差
※全品種で期間中最高気温が34℃以上
※値は3等球または4等球での結果を示す